

夏の終わりには、一冊の古典を

開倫塾

塾長 林明夫

Q 1 : 「夏の終わりには、一冊の古典を」ですか。なかなかよさそうですね。なぜ、夏の終わりに「古典」なのですか。

A : せっかくの夏休みですから、暑いとは思いますが、普段は読めないような「古典」を手に取り、時間をかけてじっくり読むことをおすすめします。夏の終わりは、「古典」の著者との「時空を超えた対話」に絶好の季節です。

Q 2 : 「古典」とは何ですか。

A : 「昔、書かれた書物。昔、書かれ、今も読み継がれる書物。転じて、いつの世にも読まれるべき、価値・評価の高い書物」(広辞苑)。これが「古典」です。

Q 3 : それではお聞きします。塾長は、中学校や高校の夏休みや夏の終わりに、どのような「古典」を読んだのですか。

A : (1) 中学生の頃は、国語の教科書に出ていた芥川龍之介の短編集や、夏目漱石の「坊ちゃん」、宮沢賢治、太宰治などの短編集などを、部活動の合間に少しずつ読んでいました。
(2) 高校生の頃は、国語の先生のおすすめで、夏目漱石や森鷗外、志賀直哉などの代表作を少しずつ読んでいました。
(3) 高校に入って古典を学ぶようになり、教科書に出ている作品は「全文」読んでみようと考え、「竹取物語」「伊勢物語」「徒然草」「枕草子」「奥の細道」「方丈記」などに挑戦。「源氏物語」はあまりにも長いので、初めの何章かで断念。外国のものでは、ルソーの「エミール」や「社会契約論」は全文読破。ジョン・ロックやパスカル、トルストイ、ドストエフスキー、ヘルマン・ヘッセなどを次から次へと読み漁っていました。

Q 4 : 結構、本が好きだったんですね。

A : (1) 中学校では部活動に明け暮れ、高校は進学校だったので、本が読めるのは、夏休みなどの長期休暇しかありませんでした。
(2) 大学生になると夏休みが 2 か月と長いので、この時ばかりと、暇があると一日中、本ばかり読んでいました。

Q 5 : 「著者との時空を超えた対話」とは何ですか。

A : 著者が生きていた時代と現代とでは、時代が違います。地域も違います。しかし、作品を通して、色々なことについて、著者が何をどう考えていたかを少しずつ知ることができます。著者はそう考えたかもしれないが、自分はこう考えるなどと考えをめぐらす。このような読書で、読者は思慮深さを身に着けることができます。

Q 6 : 学校時代の「夏の終わりの読書」は、将来役に立ちますか。

A : 毎年、夏休みには、少しずつでも生涯にわたって「古典」を読み続ける人生は、豊かで、素晴らしいと思います。学校時代に読んだ「古典」や、読む機会のなかった「古典」を、学校を卒業してから夏の終わりにじっくり読む人生は、私の理想です。岩波文庫で、とても読みやすい「源氏物語」が昨年 7 月に出版されましたので、今、挑戦中です。「古典」は、生涯を通して繰り返し読むものかもしれませんね。